Kwansei Gakuin University

心の貧しい者とは誰か？

――マタイ 5:3 の解釈をめぐって――

嶺　重　淑

序：心の貧しい者は幸い（？）

「心の貧しい人々は、幸いである」（マタ 5:3、『新共同訳聖書』、1989 年）というマタイ福音書の一節は、福音書に記されているイエスの言葉の中でも特に有名な一節である。もっともこの言葉は、ただ単に有名であるだけでなく、非常に難解で、かつ誤解を招きやすい文句でもある。というのも、「心の貧しい」という表現は、日本語では通常、まったく異なる意味で用いられるからである[1]。

日本語の「貧しい」という表現は「乏しく、劣っている」状態を意味し、その対語である「豊かな」という表現があまり否定的な意味で用いられないように、この「貧しい」という表現そのものが肯定的な意味で用いられることも稀である。そして、この「貧しい」という語にその貧しさの所在を示す「心の」という連体修飾部が付けられた「心の貧しい」という表現は、なおさら否定的な意味合いが強く、しばしば「精神が貧困な、温情に欠ける、薄情な」という意味で用いられる。

もちろん、マタイのイエスが「幸いだ」と祝福の言葉を投げ掛けた「心の貧しい者」とは、そのような否定的特性を持った人々のことではなく、この表現はそこでは明らかに肯定的な意味で用いられている。そのような意味でも、こ

1 「心の貧しい者」という訳語は、口語訳聖書（1954 年:「こころの貧しい人たちは、さいわいである」）や新改訳聖書（1975 年:「心の貧しい者は幸いです」）でも採用されているが、これは文語訳聖書（1887 年:「幸いなるかな、心の貧しき者」）以来の伝統である。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

の「心の貧しい」という訳語は誤訳とは言えないまでも、適切な訳語とは言いがたい。事実、この部分のギリシア語原文（οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι）を直訳すると「霊において貧しい者」となり、「心の貧しい者」とはかなり意味合いが異なってくるように思える[2]。

よく知られているように、このマタイの「心の貧しい者」という表現は二次的なものであり、ルカ福音書の並行箇所（ルカ 6:20 b）に記されている「貧しい者（οἱ πτωχοί）」の方が、イエスが語ったオリジナルの表現と見なされている。しかし本稿では、敢えてこの「心の貧しい者」と訳されている表現に注目し、マタイのテキストにおいて祝福の言葉が向けられた「心の貧しい者」とは具体的にどのような人々を指していたかという点をまず釈義的に検討し、さらにはその点を踏まえつつ、この表現がどのように解釈できるか、その解釈の可能性について、内村鑑三、賀川豊彦、本田哲郎という近現代の日本の 3 人のキリスト教思想家（解釈者）の解釈を取り上げつつ、考察していきたい。

1. マタイ 5 章 3 節の釈義的検討

1.1. テキストの分析

1.1.1. 文脈

今回取り上げる「心の貧しい者の幸い」の言葉（マタ 5:3）は、「山上の説教」（マタイ 5〜7 章）の冒頭に記されている「8 至福の言葉」（マタ 5:3–12）の最初のものである。これに並行するルカ版の「貧しい者の幸い」の言葉（ルカ 6:20 b）も、マタイの「山上の説教」に対応する「平地の説教」（ルカ 6:20–48）の冒頭に位置している。もっともルカの場合はマタイとは異なり、至福の言葉は 4 つのみであり（ルカ 6:20 b–23）、その一方で、マタイには見られない—その 4

2 それゆえ、最近では以下のように様々な訳が試みられている。「ただ神により頼む人々」（共同訳）、「自分の貧しさを知る人」（フランシスコ会訳）、「乞食の心を持つ者たち」（佐藤訳［新約聖書翻訳委員会編『新約聖書』］）、「霊において貧しい人たち」（岩隈訳［岩隈直訳『福音書』］）、「霊に貧しい人々」（前田訳［前田護郎訳『新約聖書』］）、「魂の貧しい者」（田川訳［田川建三他訳『聖書の世界』（新約 I）］）。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

至福にそれぞれ対応する—4つの禍いの言葉（ルカ 6:24–26）がそれに続いている。なお、マタイの場合もルカと同様、文脈に従えば、至福の言葉はまず弟子たちに向けられているが（マタ 5:1–2／ルカ 6:20 a）、群衆もまた聴衆と見なされている点を考慮しておく必要がある（マタ 5:1; 7:28。ルカ 6:17–19; 7:1 参照）。

1.1.2. 伝承と編集

双方の文脈の比較からも明らかなように、マタイ版の「至福の言葉」とルカ版の「至福の言葉」は明らかに対応しており、特にルカ版の4つの至福（ルカ 6:20b/21a/21b/22f）については、それぞれマタイに並行箇所が存在することから（マタ 5:3/5:6/5:4/5:11f）、これらの言葉は、両者の共通資料であるQ資料に由来するのであろう[3]。その中でも特に形式的・内容的統一性をもつ最初の3至福（貧しい者の幸い、飢えている者の幸い、泣いている者の幸い）については史的イエスに遡る可能性も指摘されているが[4]、総じてルカのテキストの方が原初的な形態と順序を保持していると考えられる[5]。

3　なお、マタイにのみ含まれる至福の言葉（マタ 5:5,7–10）に関しては、5節の τὴν δικαιοσύνην と 10節の第8至福全体のみがマタイの編集と見なされ、あとの部分はマタイ以前の伝承（マタイ特殊資料）に遡ると考えられる（U. ルツ著・小河陽訳『マタイによる福音書（1–7章）』（EKK 新約聖書註解 I/1）、教文館、1990年、285頁、G. シュトレッカー著・佐々木勝彦・庄司眞訳『山上の説教』、ヨルダン社、1988年、56頁）。またルカの禍いの言葉（ルカ 6:24–26）は、非ルカ的な用語が多く含まれていることからルカの編集的構成とは考えられず、またQ資料に含まれていたものをマタイが削除したとも考えにくいことから、ルカ版Q資料に由来すると考えられる。

4　例えばルツ、前掲書、285頁や H. Weder, *Die «Reder der Reden». Eine Auslegung der Bergpredigt heute,* Zürich 1985, p. 40; F. Bovon, *Das Evangelium nach Lukas I*（EKK III/1）, Zürich/Neukirchen-Vluyn, 1989, p. 295 等を参照。一方で、「迫害されている者の幸い」の言葉（マタ 5:11f／ルカ 6:23）は、キリスト教会における迫害状況を反映していることから、後代に付加されたものと考えられる。

5　例えば S. Schulz, *Q. Die Spruchquelle der Evangelisten,* Zürich 1972, p. 76 や H. Schürmann, *Das Lukasevangelium I*（HThK III/1）, Freiburg/Basel/Wien [4]1990, p. 330 を参照。もっともルカ 6:21,25 の νῦν は、ルカによる二次的な付加であろう。また、マタ 5:4 に含まれる πενθέω と παρακαλέω（70人訳聖書のイザ 61:2 参照）はルカの禍いの言葉（ルカ 6:24,25）にも見られることから、第3至福（ルカ 6:20 b／マタ 5:4）に関しては、マタイ版の方が原初的な形態を保持しているのかもしれない（F. W. Horn, *Glaube und Handeln in der Theologie des Lukas*（GTA 26）, Göttingen 1983, pp. 122f; Sato, *Q und Prophetie. Studien zur Gattungs-und Traditionsgeschichte der Quelle Q*（WUNT II/29）, Tübingen 1988, pp. 47–49 参照）。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

さて、問題となる冒頭の「貧しい者の幸い」（マタ 5:3／ルカ 6:20 b）の言葉であるが、以下のように、マタイとルカのテキストの並行関係はここでは特に顕著である[6]。

[マタイ 5:3]

Μακάριοι οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι, ὅτι αὐτῶν ἐστιν ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν.

（心の貧しい者は幸いである。天の国は彼らのものである。）

[ルカ 6:20 b]

Μακάριοι οἱ πτωχοί, ὅτι ὑμετέρα ἐστὶν ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ.

（貧しい者は幸いである。神の国はあなたがたのものである。）

両者の最大の相違点は、マタイにおいては οἱ πτωχοί（貧しい者）の後に続く τῷ πνεύματι（霊において）の部分がルカには見られない点であるが、前述したように、マタイにのみ含まれる τῷ πνεύματι という表現は明らかに二次的に付加されたものと考えられる。多くの研究者はマタイ自身がこの部分を編集的に付加したと考えているが[7]、マタイ以前にすでに付加されていた可能性も否定できず、この点については明らかにすることはできない[8]。また、後半の αὐτῶν と ὑμετέρα の相違は、マタイの至福における三人称とルカの至福における二人称の相違に対応しているが、マタイの三人称の方が原初的であると考えられる[9]。文章末尾の「天国」（βασιλεία τῶν οὐρανῶν）という表現については、これを好むマタイが、元来の「神の国」（βασιλεία τοῦ θεοῦ）という表現から書

6 この至福の言葉はトマス福音書・語録 54 にも伝承されている（「あなたがた、貧しい人たちは幸いである。天国はあなたがたのものだから」）。

7 例えば、シュトレッカー、前掲書、58 頁や W. D. Davies/D. C. Allison, *The Gospel according to St. Matthew I* (ICC), Edinburgh 1988, p. 442 がそのように主張している。

8 ルツ、前掲書、284–285 頁を参照。

9 おそらくルカ版における最初の 3 至福については元来三人称で構成されていたのに対し、第 4 至福だけがすでに Q において二人称で構成されていたものと考えられる。多分ルカはこの第 4 至福と禍いの言葉との関連から、最初の 3 至福の人称を三人称から二人称へ変えたのであろう。ルカが直接的な呼びかけを好むこともこの点を示しているように思える。確かに、ルカがなぜその変更を、最初の 3 至福の前文まで一貫させなかったのかという疑問は残るが、それでもこの混合形を原初形態のなごりと見なすことは可能であろう。事実、至福の言葉は三人称で構成されているが、それに続く後続文では二人称に変えられている例が旧約聖書にも見られる（詩 128:1; 箴 3:13–15 参照）。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

き換えたのであろう[10]。

1.2. 釈義的検討

1.2.1. 幸い

μακάριος（幸いな）という表現は、元来は神々に対して用いられていたが、後に人間にも適用されるようになり、「最高に幸福な」という意味で用いられるようになった。至福の言葉は古代世界の様々な文化圏に広まっていたが、とりわけ旧約聖書やユダヤ教文献に見られ、知恵文学においては「行為—結果」の関連の表現として（例えば詩 1:1f; ヨブ 5:17; 知恵の書 3:13）、黙示文学においては終末論的な意味で用いられた（例えばダニ 12:12; エチオピアエノク 99:10; ソロモンの知恵 17:44）[11]。新約においても特に終末論的・宗教的観点が重要である（ルカ 14:14; ヤコ 1:12; 黙 14:13）。イエスの至福の言葉は、それが短い理由づけの後続文において将来的な救いを約束している点において際立っている。

1.2.2. 「心の貧しい者」（οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι）

「心の貧しい者」について考察する前に、まず原初形である「貧しい者」の意味について確認しておきたい。ここで「貧しい者」と訳されているギリシア語の οἱ πτωχοί は「物質的な貧者」を意味し、それも πένης（2 コリ 9:9 参照）とは異なり、まったくの無一文で、物乞いする以外に生活手段をもたない極貧者を意味している[12]。確かに πτωχοί は、70 人訳聖書においてはしばしば宗教的意味で用いられる עָנִי の訳語であり（詩 13:6; 21:25; 68:33; イザ 61:1; 66:2; 箴 16:19 参照）、その意味では、「敬虔な者」という宗教的な意味で用いられる可能

10 この表現はマタイに特有であり、マタイはしばしばマルコにおける「神の国」を「天の国」に書き換えている（例えば、マコ 4:11 とマタ 13:11、マコ 4:30 とマタ 13:31 を比較参照）。

11 典拠については F. Hauck, Art. μακάριος κτλ., ThWNT IV, pp. 365–367 や Davies/Allison, op. cit., p. 431 等を参照。

12 F. Hauck, Art. πτωχός κτλ., ThWNT IV, pp. 886 や E. Scheffler, *Suffering in Luke's Gospel* (AThANT 81), Zürich 1993, pp. 60–63 等を参照。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

性がまったくないわけではない。しかしながら、この語は決して「一定の型の敬虔のみ、および／ないし外面的事情とは無関係の、内面的な貧しさのみを意味しない」[13]。そのような意味でも、ここでまず確認しておくべきことは、この語が何より物質的、具体的な貧しさの意味で用いられていること、さらには、その貧しさの程度が、広範な意味で用いられる日本語の「貧しい」という表現とは異なり、非常に際立ったものであるという点である[14]。

さて、マタイにおいてはこの「貧しい者」に変わって「心の貧しい者」(οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι) という表現が用いられているが、これによって、どのような意味上の変化がもたらされるのか。ギリシア語としても極めて珍しい[15] この表現の意味については、幾つかの可能性が考えられるが、それは τῷ πνεύματι という与格を具体的与格と解するか、関係の与格と解するか、さらには πνεῦμα を神の霊（聖霊）の意味で解するか、人間の霊の意味で解するかによって異なってくる。

この与格を具体的与格と見なし、πνεῦμα を神の霊（聖霊）の意味で解して、この表現を「神の霊によって貧しい者」、「神の意志による貧者」(1) と解することも、あるいは πνεῦμα を人間の霊の意味にとり、「自分自身の精神によって貧しい者」、すなわち「自発的な貧者」(2) と解することも文法的には必ずしも不可能ではない。しかしながら、両者とも表現の仕方あるいはマタイの用語法の観点から不自然であり、蓋然性は高くない[16]。

そこで、これを関係の与格と解すると、この πνεῦμα を神の霊の意味で解することは難しくなる。なぜなら、その際にはギリシア語では別表現が用いられるはずだからである[17]。それゆえ、この πνεῦμα は人間の霊の意味で捉えるべき

13 ルツ、前掲書、291 頁。

14 少なくともルカにおいてはこの語は一貫して物質的な意味で用いられている（ルカ 14:13,21; 16:20,22; 18:22; 19:8）。事実このことは、ルカ 6:20b の πτωχοί が、明らかに物質的な意味で用いられているルカ 6:24 の πλούσιοι と対照的に用いられていることからも明らかである。

15 この表現については新約聖書のみならず、古典ギリシア語文献においても並行箇所が見出されない。

16 この点については、ルツ、前掲書、709 頁、注 46,47 を参照。

17 U. Luz, *Das Evangelium nach Matthäus I* (EKK I/1), Düsseldorf/Zürich/Neukirchen-Vluyn [5]2002, p. 278, n. 59 を参照。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

であり、そうするとこの表現は「心情の点で貧しい者」、「絶望した者」(3)、あるいは「精神に関して貧しい者」、すなわち（神の前に）「へりくだった者」(4) という意味に解される[18]。双方の意味は重なっており、決定することは難しい。ただ、いずれにせよ、マタイの段階においては、本来の具体的な貧しさの意味は後退し、謙遜という倫理的態度が前面に出てきており[19]、内面化、倫理化の傾向が現れていることは明らかである[20]。

1.2.3. 後続文

この至福の言葉に続く、ὅτι によって導入される後続文では、これらの心の貧しい者たちが幸いとされる、その理由について述べられる[21]。すなわち、天の国が約束されているという理由のゆえに彼らは幸いなのである。この後続文は、第二、第三至福の後続文とは異なり、現在形で記されているが、明らかに未来の状況を言い表している[22]。また、天の国の具体的な意味については、第二至福以降の後続文が示している。

以上のことから、マタイの第一至福の内容は以下のようにまとめられる。「へりくだり、自己に絶望する者は幸いである。なぜなら、彼らには天の国が約束されているから」。

18　ルツ、前掲書、292–294 頁を参照。クムラン文書の中で（『死海文書』「感謝の詩篇」14:3;「戦いの書」14:7)、ギリシア語の「霊において貧しい人」に相当するヘブライ語表現が同様の意味で用いられていることも、この見解の一つの傍証になるであろう。

19　事実、古代教会はこの理解を受け継ぎ、大多数の教父たちはこの表現を謙遜の意味で解している。

20　ルツ、前掲書、293–294 頁。これに対して Weder, op. cit., pp. 51f は、この表現においては、従順さによってへり下った者のことではなく、自分の知恵において途方にくれている者のことが意味されていると主張している。

21　[μακάριος ＋ 主語 ＋ ὅτί] という構文は 70 人訳聖書の創 30:13; トビ 13:16 やマタ 16:17 等に見られる。

22　この後続文を現在の意味でも解そうとする Weder, op. cit., p. 46 に反対。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

2. 日本人による解釈の試み

以上の釈義的検討から、イエスの山上の説教の冒頭で至福の言葉を語り掛けられている「心の貧しい者」（οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι）が、「人間の霊に関して貧しい者」、すなわち「（神の前に）へりくだった者」、「絶望した者」であることが明らかになった。しかしながら、この表現を伝統的に「心の貧しい者」と訳出してきた日本においては、必ずしもそのような意味で理解されてこなかった。ここでは、この難解な表現を独自の視点から解釈しようと試みた3人の日本人思想家の解釈を紹介し、彼らの解釈の妥当性と意義、さらにはそのような解釈を生み出した背景について考察していきたい。

2.1. 内村鑑三（1861-1930）

最初に、近代日本の代表的なキリスト教思想家である内村鑑三の解釈を取り上げたい。内村は何度も山上の垂訓（説教）の解釈について記しており、この「心の貧しい者」という表現についても複数回にわたって註解を試みているが、その理解は必ずしも一貫していない。

事実内村は、しばしばこの「心の貧しい者」という表現を「おのれにたよりなきを感じ、罪ふかきを感ずるもの」[23]、「自己のうちに何の善きものをみとめず、…また何の誇るところなく、心霊的に癒しがたき空乏を感ずるもの」[24]、「心より自己に頼まずして神により頼むもの」[25]、私心をことごとく脱し、欲心をたくわえず、自分が何者であるかを悟る謙遜の人[26]というように、倫理的な態度との関連から解している。このような理解は釈義的には適切なものであるが、それだけに目新しさは感じられず、彼独自の解釈といえるものは見られない。

23 「聖書之研究」（1906年11月）、内村鑑三著『内村鑑三聖書註解全集』第8巻、教文館、1960年、88頁。
24 「聖書之研究」（1915年10月）、同書、107頁。
25 「聖書之研究」（1918年3月）、同書、94頁。
26 「東京独立雑誌」（1899年5月）、同書、89頁。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

しかしその一方で、「聖書之研究」1914年3月号に掲載された「心の貧しい者」に関する彼の説明は特に詳細であり、その解釈は少なからず異彩を放っている[27]。その註解の中で、彼はまず「貧しい者」（物質的貧者）について以下のように解説している。すなわち、「貧しい者」とは金銀、財貨、土地、家屋、衣類等、物を持たない者であり、この世的な理解では彼らは決して幸福ではないが、イエスの立場からすれば、この世にあって何物も持たない彼ら貧者にこそ来世は与えられるのであり、それゆえ、彼らは幸いなのである。しかしながら、世の中にはこのような物質的貧困にまさる貧困、すなわち「徳性欠乏の貧」が存在する。そしてこの種の貧者こそが、まさに「心の貧しい者」であるというのである。

つまり、この世のいわゆる貧者は、身につけるものに乏しい「身の貧者」であるが、イエスがここで至福の言葉を告げた「心の貧しい者」、すなわち「心霊の貧者」とは、その奥底から貧しい者という意味であり、「身につける物にとぼしきはもちろん、さらにその上に心霊につけるものにおいてもとぼしきものである」[28]。心霊の富とは無形の富のことであり、知識、知恵、そして何より徳のことであるが、それゆえ、心霊の貧者とは「知徳ふたつながらにおいてとぼしきもの」[29]を指しており、このような者こそが幸いだとイエスは告げるのである。

この意味で、貧困の極みは身の貧（物質的貧困）ではなく心霊の貧であり、それゆえ、心霊の貧しい者が幸いだと述べるこのイエスの言葉は、身の貧者の幸いについて述べる言葉（ルカ 6:20 b）以上に不可解であり、謎である。そして、このように、内に何ものも持たない心霊の貧者の実例として、自己に何の善いものも見出さず、誇るべき知恵も、よるべき徳もなく、「罪人のかしら」であった使徒パウロを挙げている（ロマ 7:18ff 参照）[30]。事実、「清貧のゆえをもって誇る世のいわゆる潔士、品性の高潔をもてみずから足れりとするいわゆ

27 「聖書の研究」（1914年3月）、同書、98–102頁。
28 同書、99頁。
29 同書、100頁。
30 同書、100頁。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

るキリスト教紳士、信仰の正しきをもって神に特別に近きものなりと信ずる教会信者」[31] は、物質的富を持たなくても心に多くのものを持つ心霊の富める者であるが、その一方でイエスが実際に至福の言葉を語ったのは、心霊において何も持たない者なのである。

さらに内村は、心霊の貧者と富者について、「ファリサイ人と徴税人の譬え」(ルカ 18:9–14) を引用して説明を試みている。彼によると、清廉潔白のファリサイ人に代表される、聖人、義人、潔士、烈婦は心霊の富める者であり、彼らが天国に入るのではなく、貧しい取税人や娼婦等に代表される心霊の貧者こそが天国に入るのである。

この註解において特筆すべき点は、内村が「心の貧しい者」を（物質的な富のみならず）知徳に欠けている者と見なしている点であり、その意味で、まさに何物も持たざる者こそが「心の貧しい者」なのである。確かに、ここではむしろ知徳に欠けていることを自覚している者のことが特に言われているのではないかという疑問も生じるが、もしそうであるなら、心霊の貧しい者の幸いについての言葉は身の貧者の幸いについての言葉以上に不可解だとする彼の主張が理解できなくなる。そのような意味でも、内村はここで「心の貧しい者」を、知徳に欠けていることを意識している者というよりも、単に知徳に欠けている者と見なしているのであり、その意味で、謙遜でへりくだった者というような、この言葉に倫理的な態度や特性を見ようとする理解からは大きくかけ離れている。というのも内村は、倫理的な資質をもった人々ではなく、むしろそのようなものを一切持たない人々を「心の貧しい者」と見なしているからである。この言葉を倫理的な視点から解釈しようとする傾向を抑制しようとする彼のこのような理解は、山上の説教を一般的道徳や倫理的勧告としてではなく、弟子（信者）に向けられた天国の福音、慰めの言葉と見なす内村自身の山上の説教理解とも密接に関連しているのであろう[32]。

31 同書、100–101 頁。
32 同書、64–69 頁。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

2.2. 賀川豊彦（1888-1960）

次に、大正時代から昭和時代にかけて、キリスト教社会運動家として幅広く活躍した賀川豊彦の解釈を取り上げたい。賀川の山上の説教解釈は、『山上の垂訓』[33] という彼の著作を通して知ることができるが、この書物は、1927 年の夏に女子農民福音学校でなされた講演の内容がもとになっている。

本書の冒頭部分では「山上の垂訓」全般について序論的に述べてられているが、そこで彼は「山上の垂訓」はあらゆる宗教の序曲であると同時に終局であって、どんな宗教や倫理学もこれに優るものはないとして、それを高く評価している[34]。さらに彼は、山上の説教冒頭の至福の言葉（マタ 5:3-12）を 3 つの部分に区分し、最初の 4 至福（貧、悲、柔、義［3-6 節］）を消極的部分、次の 4 至福（憐、清、平和、迫害［7-10 節］）を積極的部分、そして最後の 11-12 節を以上の 8 至福を総合した結論部と見なしている。そしてこの一連の至福の言葉が、無（貧）から出発して迫害、そして十字架に至るというように、十字架の山に登る道筋になっていると述べているが[35]、まさにその「無からの出発」という観点から、宗教生活の出発点となるべき「心の貧乏（無）」について彼は説明を試みている[36]。

彼によると、世の中には二種類の金持が存在し、一つは、いくら大金を持っていても物質的に恵まれていても、「まだまだ足りない」と不平を言う「足りない貧乏」で、彼はそれを「金持貧乏」と形容している。もう一つの金持ちは「貧乏金持」であり、それが本当の金持ちだと彼は考える。「貧乏金持」というのは、まさに、一夜にして家族や家畜等、あらゆる財産を失っても、「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」と語った旧約聖書のヨブのように、自分は何も持たずに裸で生まれてきたことを自覚し、そこから出発して、今身につけている着物があることを有難く思い、それに満足できる者を指している。しかし現実の人間は、

33 賀川豊彦著『山上の垂訓』、キリスト新聞社、1949 年。
34 同書、1-2 頁。
35 同書、5-6 頁。
36 同書、7-9 頁。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

多くの場合、さらに多く得よう、もっと儲けようとするから、「足りぬ、足りぬの貧乏」（＝金持貧乏）になるというのである。

以上の点を踏まえて、賀川はこのように結論づける。「何も無いところから始めることは、我々にとって大きな幸福である。天に登るには何も無しから皆が出発することが大切である」[37]。すなわち、無（零）から始めることが重要であり、そうすれば、僅かなものにも満足できるようになり、そのような人こそが実は最も幸福な人であり、天国に最も近い者である。賀川によると、病気の治療についても同様のことが言え、そのときはやきもきして魂を見失うのではなく、何もないところから始めるべきで、そのように、まず心をからっぽにすることによって、生命の命を入れることができるというのである[38]。

「心の貧しい者」についての、このような賀川の理解は独特と言える。彼はここで、「心の貧しい者」を、物質的な富を追い求めようとすることなく、慎ましい生活に満足できる者、現に与えられている僅かな物だけで満たされる、足ることを知る者と見なしている。注目すべきことに、賀川にとって「心の貧しい者」は、その当人が物質的に貧しいかどうかという点について直接問題にされないまでも、具体的な物質的富との関連において捉えられている。そして、物質的に恵まれていなくても、その境遇に満足できる者こそが心の貧しい者なのであり、端的に言えば、貪欲な者とは正反対の、物欲のない者、欲求のレベルの低い者がそれなのである。

このような賀川独自の解釈の背景には、彼自身の実存理解があることは想像に難くない。賀川自身、幼い頃から極度の貧しさを経験し、大変な悲しみや苦しみを経験してきたということもあり、後になって彼は、人々が金儲けすることを断念してお互いに助け合えば、飢える心配はないのであり、物欲を断ち切り、何もないところから始めることができれば、貧しさも苦痛ではないと考えるようになった。実際彼は、極度に貧しい人の住む貧民窟へと自ら移り住んで、そこで彼らと共に生活を営んでいくが、そのような体験の中から、神から祝福

37 同書、9頁。
38 同書、10頁。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

される「心の貧しい者」とは、貪欲でない者、僅かなもので満足できる者という理解が生まれたのであろう。

2.3. 本田哲郎（1942–）

最後に、大阪の釜ヶ崎で日雇い労働者と連帯しつつ、野宿を強いられている労働者たちを支援する活動を今日に至るまで精力的に続けているカトリック神父、本田哲郎の解釈を取り上げたい。彼の解釈は、最近刊行された彼の著作『釜ヶ先と福音』[39] から知ることができる。

本書はいわゆる研究書ではなく、幾つかの講演と、彼自身の福音理解、信仰理解を書き下ろした多くの小文から構成されているが、本書における一つの特徴的な視点は、小さい者たちと連帯するキリストは、決して支援する側に立ってそうしているのではなく、むしろ支援される側の弱い立場に立ってそうしているのだというものである。そして、このような理解は、「心の貧しい者」に関する彼の解釈とも密接に関わってくる。

この言葉の解説に際して、彼はまず、この言葉が誰に向けられているかを問題にする。しばしば教会の中では、この言葉は、教会のメンバーに向けられていると見なされがちであるが、この言葉を聖書解釈の原則どおり、テキストの文脈に従って読むならば、この言葉の実際の対象者は、イエスの評判を聞いて集まってきた病気のために苦しみ悩む者、悪霊に取りつかれた者、てんかんの者、中風の者などの、あらゆる病人ということになる（マタ 4:24）。そして、これらの病人たちこそが、「心の貧しい者」であると本田は見なすのである[40]。

彼によると、伝統的な解釈は「心の貧しい者」という表現の「心の」の意味を取り違え、「精神的に貧しい状態（内面的な貧しさ）に陥っている人」と解してきた。ここでの「心」は「霊」を意味しており、人間が霊として表現されるときには、神と対話できる存在として捉えられることから、この「心の貧しい者」という表現は、「神様とコミュニケーションができるかけがえのない被

39 本田哲郎著『釜ヶ先と福音—神は貧しくされた者と共に—』、岩波書店、2006 年。
40 同書、98–99 頁。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

造物である人間が、貧しい小さくされた状態におかれてしまっていること」[41]を意味しており、それゆえ、彼によると、「貧しい者は幸いである」というルカのメッセージも、「心の貧しい者は幸いである」というマタイのメッセージも本質的に同じものなのである[42]。

さらに本田は「心の貧しい者は幸いである」の「幸いである」という訳語も誤訳と見なしている。彼によると、「幸い」と訳されているμακάριοςというギリシア語は、「祝福されています」、「そのままつきすすんでいいよ」という保証、元気づけの言葉であり、貧しい状態に留まっていなさいという意味ではない[43]。それゆえ、彼はこの一文を「心底貧しい人たちは、神からの力がある」[44]というように翻訳している。

3. 結び：テキストの釈義と解釈

以上、「心の貧しい者」という表現について3人の日本人による解釈を概観してきた。内村はこの表現を、（物質的富においてはもちろん）知徳においても欠乏する者と解し、賀川は、強欲な者とは正反対に、僅かな物で満足できる者と見なし、また本田は、この表現を実質的には物質的な貧者と同様であると解した。いずれの解釈も独特であり、釈義的に裏付けることは極めて困難であるが、これらの解釈が、それぞれの解釈者の実存的状況から生み出されてきたという点を考えるなら、それぞれに興味深いものであると言える。

事実これらの解釈はそれぞれに個性的なものであるが、注目すべきことに、いずれの場合も「心の貧しい者」という表現を、謙遜、へりくだりという倫理的な資質の観点からは捉えようとしていない。日本の文化においては、むしろ謙虚、謙遜という特質が伝統的に重要な徳目として重視されてきただけに、この点は非常に興味深い。あるいは、日本には謙遜の徳を重視する精神的土壌、

41 同書、100頁。
42 同書、101頁。
43 同書、101−102頁。
44 同書、101頁。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

風土があるからこそ、それだけに一般的道徳との混同を避けるという意味でも、そのような解釈を遠ざけようとする傾向があったのかもしれない。

聖書テキストの釈義と解釈について考えるとき、常に問題となるのは、釈義的には明らかに論証され得ない解釈をどう捉え、評価するかという問いであろう。釈義的に論証できない解釈はすべて否定されるべきなのか。それとも、一部の解釈については、釈義的蓋然性とは関係なく受け入れられるべきなのか。そうだとするなら、その基準はどこに見出すべきなのか。それとも、すべての解釈はそれぞれに意味を持っており、尊重されるべきなのか。

もちろん、この問いに答えるのは容易なことではない。しかしながら、前述した3人の日本人の解釈のように、解釈者の実存的な理解から生み出された解釈には、たとえ、釈義的には問題があろうとも、そこには一定の真理が存在するように思われる。事実、これらの解釈を評価する際、この「心の貧しい者」という表現自体がすでにオリジナルなイエスの言葉ではなく、すでに一度は翻訳され、さらに伝承の過程で解釈されて生み出された二次的な表現であることを我々は今一度思い起こすべきであろう。

NII-Electronic Library Service